

令和7年度 名古屋市立大学 学校推薦型選抜A

(人文社会学部 心理教育学科)

小 論 文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は6ページあります。
3. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
解答用紙は3枚です。
4. この冊子は試験終了後、持ち帰ってください。

許可なしに転載、複製
することを禁じます。

問1 次の文章を読んで、問1-1および問1-2に答えなさい。

子ども・若者が主体性や創造力をはぐくんでいくために、おとなはどのように子ども・若者と場を共有し、どのような関係をつくっていけばよいのでしょうか。

「どのような関係を子ども・若者とつくるか」といっても、今回はおとなが子ども・若者と積極的にかかわりあうのではない関係に注目していきます。なぜなら、意図している場合だけでなく、意図していない場合にも相互作用が生じながらわたしたちの日々の生活はまわっているにもかかわらず、現在、教育・心理・福祉などあらゆる分野で、おとなが子どもにどう意識的にかかわっていくかということばかり論じられているように感じるからです。どうかかわるか、ということと同時に、おとながかかわらないことにも目を向けていくことが大切なのではないのでしょうか。「門前の小僧習わぬ経を読む」ということわざもあるように、実際には意図的にかかわりあいが無いところでも、人が「共に存る(共在 co-presence)」ことは、時に大きな影響力をもっています。

子ども・若者とおとなが互いの存在を認識しつつもかかわらない場合の関係形態がもつ積極的意味について、子ども・若者の生活世界とおとなとの関係—特におとなが彼らに対して注いでいる視線—を大きく四つに分けて考えていくことであきらかにしてみましょう。

第一は子どもの生活世界の中におとながいて、おとなが子どもに対して視線を注ぎつつその様子を「見守る」という関係です。第二は、子どもの生活世界の中におとなは共に存在しているのだけれども、おとなは子どもに格別に注意を向けてはおらず、特に介入もしないという「共在」の関係です。第三は、子どもの生活世界を認識し、そこでの子どもの様子を目の端に捉えつつも、おとなは子どもの生活世界の埒外にいて、「見て見ぬふり」をする関係、第四は同じくおとなが子どもの生活世界の埒外にいて、その上で子どもを「ほおっておく」関係です。

第一の、おとなが子どもを「見守る」関係とは、子どもが自由や裁量をもって何かをすることをおとなが応援し、少し距離をおきつつ「見守る」関係です。このとき「見守る」と「見張る/監視する」ことの違いに、おとなはよく注意をする必要があります。精神科医の宮地尚子さんは、この二つの違いをこのように説明しています。

「見守ること」と「見張ること」はどちらも子どもの安全を願っての行為である。けれども、一つには大人が子どもを信頼しているかいないか、もう一つには大人が社会を信用しているかいないかという違いがそこにはありそうだ。自分の評価基準に子どもが届いてないと思うとき、子ども一人では対処できないと思うとき、「見守る」は「見張る」に変わる。世の中には危険がいっぱいだと思うとき、何かあったら自分が世間に責められると思うときも、つい過保護や過干渉になってしまう。

おとなが子どもと社会(地域)を信頼せず、子どもを「見張る/監視する」ことは、子ど

もから「子どもの領分」を奪い、子ども同士のあいだに生まれる自律と自立に向けての相互教育力を弱めてしまいます。おとなが見ていることで、子どもがのびのびと安心していられるようになるか、それとも緊張してしまうか、が見守ると見張るを分ける分水嶺となります。

次に「共在 (co-presence)」の関係ですが、これは「一緒にいながら、別のことをしている。そこに一緒にいながら、一緒にはいない。そこには一緒にはいないのだけれど、一緒にいる。それぞれがそれぞれの内的な世界をもちながら、でも一人ではない」というあり方です。ここには、未熟な存在としての誰かを「見守る」のではなく、一人の個としての人間と「共に在る」あり方が存在しています。そして、「一人ではない」という安心感が子どもが好きなことをして、自由に過ごすことを可能にし、その中で主体性も創造性も育っていきます。

社会学の祖とも言われているジンメルによれば、社会とは諸個人間の心的相互作用によって形成されていると考えられます。子ども・若者が大人をはじめとした様々な他者と「共在」し、相互作用を及ぼしあえるような関係が多様に生まれることによって、社会のあり方も多様なものになるでしょうし、その社会での子ども・若者の育ちも多様性をもったものになっていくでしょう。子ども・若者にとっては、おとなと「共在」し、おとなの姿を横目で見ることを通じて、さりげなく社会を知るよすがを得て、生き方のモデルと出会うことが可能になるのです。

三つ目の「見て見ぬふり」をする関係は、子どもの生活世界を認識し、そこで子どもの様子を目の端に捉えつつも、おとなは子どもの生活世界の埒外にいて「見て見ぬふり」をするというもので、このような関係は〈子ども社会〉を復権させるためには欠かせないでしょう。

増山均さんは、地域のおとなたちとの緊張関係のもとで、子ども自身が自治のもとに生活の主人公になっている〈子ども社会〉〈子どもの領分〉の重要性を強調しています。そして、〈子ども社会〉が、地域の住民生活の中で正当に認められていないことの問題性を指摘しています。なぜなら、〈子ども集団の教育力〉と〈子ども社会とおとな社会の緊張関係〉の両方があるこそ、子どもは一人前のおとなへと育っていくことができるのであり、「子どもたち独自の世界というものを承認し、おとなが教えこむだけでなく子ども同士が大きい子から小さい子に伝えあい、育てあっていく営み」が欠かせないものであることを、昔のおとなは経験を通して知っていたからです。

また、わたしは、「教育」、さらには「学習」という言葉さえ超えて、「育つ」という観点から、四つ目の〈ほおっておく〉ことの重要性を強調したいと思います。木村伊兵衛さんや土門拳さんといった昭和を代表する写真家が切りとった子どもたちを見てみると、かれらは、イキイキとしていて野性味があり、力強く、「いき(生き、活き)」があります。しかし、写真の中の子どもたちは、主体性を発揮し、創造的にあそんだり生活をつくりあげたりしていけるようおとなたちから配慮されていたかといえ、そんなことはないでしょう。

子どものことなどかまう余裕のない親のもとで、たいしたあそび道具があるわけでもなく、ただ子どもたちが集まる中で、あそびや活力が生まれていたのではないのでしょうか。そ

の背景にあるのは、近所の仲間と今日は何をしようかというワクワク感や期待感だったかもしれませんが、あそぶものはないけれど時間だけはある中での退屈さだったかもしれませんし、あそびそのものに対する熱中や楽しさかもしれません。

いずれにしても、〈ほおっておかれる〉中で、近所の色々な年齢の子どもたちがかかわりあい、あのイキイキとした表情やあそびが生まれていたように思うのです。子どもを気にかける余裕がなかった時代だからこそ、子どもの創造力や「いき」が発揮されたのだとするならば、なんとも皮肉なことです。

現代社会では、子どもに対するおとなの関心が高まり、おとなは子どものためを思って、あれやこれやと子どもに手を出しがちです。しかし、大田堯さんは、人間の発達の論理として、〈問いと答の間〉一刺激に対してどのような反応をするかじっくり考えた上で選択できるようなゆとりを保障することが、教育的働きかけとして重要なのではないかと問いかけています。わたしは、子ども・若者に〈問いと答の間〉を保障するのと同時に、おとなの側も子ども・若者を教育的まなざしでからめとるのではなく、それぞれの子ども・若者の育ち方の多様性を長い目で見ながら、人が育つとはどういうことなのかという〈問い〉に対して〈問いと答の間〉を長くもつことが求められるのではないか、と思います。

つまり、社会の学校化や少子化がすすみ、常に親や教師などのおとなの目にさらされがちな現在だからこそ、子どもがみずからの内にもつ〈生きる力〉を信頼し、子どもを〈ほおっておくこと〉がおとな社会に求められます。それはもしかすると、子どもよりもおとなにとってこそ、落ち着かないものかもしれません。今こそその「落ち着かなさ」に耐えるという訓練を、おとながする時なのではないでしょうか。

【出典】阿比留久美著『子どものための居場所論——異なることが豊かさになる』

2022年、かもがわ出版（一部を改変して抜粋）

問1-1 上記の文章を400字程度で要約しなさい。

問1-2 上記の文章を踏まえ、あなたが保育士・幼稚園教諭としてどのような実践を重視したいか400字程度で記述しなさい。

問2 次の文章を読んで、問2-1および問2-2に答えなさい。

創造性の高い人は自立的である。自分の考え、自分の判断などを踏まえて、しっかりと立つ力がある。と言っても、子どもはすべて大人の保護のもとに大きくなっていくのだから、自立に至るステップとして「反抗」が、まず生まれてくる。「第一反抗期」、「第二反抗期」などという言葉があるように、人間誰もそれ相応の自立をしていくのだから、一般的に見ても、それなりの反抗期をもっている。ただ、創造性の高い人は、反抗の程度が他と異なっている。それに、反抗に限らず、悪というのは自立へのひとつの契機として生じることがある。

日本で有名な思想家・哲学者の鶴見俊輔さん（1922-2015年）は、首相にもなるかと思われる政治家の家に生まれた。母親は長男である俊輔さんを「幹部候補生」として育てようとした。何かにつけて絶対に優れていなくてはならない。鶴見さんが言うには、「長男、なんだ！ ってわけですよ。だから、ボカボカッとやられてるわけ。もうフラフラですよ。どうしたらいいのかねえ。つらい、つらい」という状況である。

この母親に反抗するとなると普通の方法では何の役にも立たない。結局、自殺という手段に訴えることになる。「手首を切るとか、カルモチン飲むとか、たばこの『バット』を食べるとか、いろんなことをやりました。それと、今でも渋谷の道玄坂へ行くと思い出しますが、あそこのカフェ街でカルモチンを飲んで寝たんです。ほんとうに凄まじいことだ。「それは、おふくろに対する一種の……なんていうのかなあ、対抗ですねえ」。

「動機はというと、今から思うと単純なんです。おふくろに対して、はっきりオープンに世の中で復讐したかったんです。自罰的なんですね。おれは悪い人間だから死ぬ。悪い人間としてしか、おれは生きられないんだ。それですね。それも生の原型だな」。

これを聞いて、鶴見さんの母親を「悪い母」と思うのは即断である。鶴見さんもそのことは認識しておられ、自分の姉や弟にとって母親は何も「悪い」母親でなかったと語っている。これが家庭関係とか人間の「運命」としか呼びようのないものの不思議なところである。きょうだいのなかの誰かが「反抗」の役をしっかりと担うと、他の子どもはそんなことをあまりする必要がなくなることがある。家族はしばしば全体として運命を背負っているようなところがある。

鶴見家のこの凄まじい母・息子の対決について知ると、二人のうちのどちらが「悪い」などということではなく、そのような運命（と言うのが嫌な人は、「課題」とでも言うべきか）を背負っていたと思われる。鶴見さんのその後の人生をみると、この課題を生き抜いてきたとも言える。もちろん、対決すべき相手は個人としての「母親」を超えてしまっているが。

後になって振り返って考えると、このような言い方もできるが、俊輔少年が母親との関係のなかで行った行為は、その時にそれを判断するほとんどの人に「悪」というレッテルを張られるものであった。母との対決のなかで、どうしても「正しい」相手に対して、子どもと

しては、万引、性への強い関心、反抗的ないたずらなどに走らざるをえない。このようなさまざまな悪事を重ね、「ぼくは悪人」という自覚をもった子どもが、どのようにして、悪を創造の起爆剤のようにして、今日、鶴見俊輔という思想家になったのかについては、新藤謙の『ぼくは悪人——少年鶴見俊輔』に詳しく語られていて興味深い。ここでは、これ以上論じることは避けるが、私自身が高校の教師をしていた者として、果たして自分の担任する子どものなかに、このような「悪い」生徒がいるとき、それに適切に接していったかどうか、と考えると冷汗がでる感じがする。そんな「悪い」生徒は、退学するべきだなどと考えたのではなかろうか。創造性というのはなかなか恐ろしいものである。

学校に行かない子どもを、われわれは一括して「不登校」と呼んでいる。かつては「登校拒否症」とか「学校恐怖症」とか言っていたのだが、そうすると、子どもが頑張って登校を拒否しているとか、あるいは、子どもが学校を恐ろしいところと思っているとか決めつける誤解が生じる。登校しない理由にしろ、その状態にしろ、実にさまざまなので、ともかく誤解を避けて一般的な名称として「不登校」と呼んでいる。

ところで、私がお会いした、日本の動物行動学者の日高敏隆さん（1930-2009年）の小学生の頃の話は、まさに「登校拒否」の状態である。学校が「もう嫌になってね。断固いかなくなったんです」というのだから、文字どおり登校拒否である。どうしてそうなったかを説明するためには、日高さんが子どもの頃に通っていた小学校の状況を少し述べねばならない。当時は軍閥の力がだんだん学校教育にも及んでいて、なかでも日高さんの小学校はその最先端のようなところだった。「朝礼のときに、校長がこぶしを振り上げて列の中を歩いていく。だれかちょっとでもわき見をしたら、パーと殴り倒す。気持ちが悪くなって倒れでもしたら、蹴っ飛ばして列外にたたき出す」というような恐ろしい小学校なのだ。日高さんは病弱な子どもだから、このような軍国主義教育は、たまったものではない。

その上、子どもの時から日高さんは昆虫に興味があった。現代ならともかく、当時だと「昆虫学で飯が食えるか!」というときである。親からは昆虫好きを否定される。学校は嫌だし、当時だと病弱なものはどうせ青年になっても辛いことばかりに違いない、というので、日高少年は真剣に自殺を考える。

ところが、担任の先生は素晴らしかった。どうしてわかったのか、日高少年の自殺の意図を見抜き、両親に対して、子どもが死のうとまで思っているのだから、何とか好きなことをやらせるようにと、昆虫学をすることを承認させてしまう。そして、少年に対しては、昆虫学をほんとうに勉強するためには学校の他の科目を勉強する必要があると説得して、少年に登校をすすめる。ただ、この先生の偉かったところは、自分の学校が日高さんに合わないことを認め、他の小学校に転校をすすめる、そこで日高さんは登校するようになる。担任の先生が自分の力によって何とかしようとはばかり考えず、転校を考えたりするところは大したものだが、この点は省略して、この「登校拒否」を日高少年の自立の契機として考えてみてはどうであろうか。

このときの少年の「登校拒否」は、まず学校に対する反抗として行われている。しかもそれは時代の潮流に対するものとも見ることができる。自立のための反抗は、必ずしも両親に対してする必要はない。自分を取り巻き、取り込もうとするものに対して向けるといいのである。しかし、親に対するときと比べると、時代の流れに対する反抗はなかなか大変である。少年は反抗に挫折しそうになり、自殺を思い至るほどになる。

鶴見さんの場合も自殺の意図が見られた。急激な人格の成長的变化は、象徴的には「死と再生」の過程として表現するのが一番ぴったりであり、人格が急に変化するときには、その背景にいろんな形で「死」がはたらいていることが多い。自殺はもちろん防がねばならない。鶴見少年や日高少年が、ほんとうに自殺していたら、現在の日本は非常に大切な人材を二人失っていたことになる。自殺はそんな意味でも「悪」である。しかし、だからと言って、それをすぐに排除するのも、どうかと思われるところがある。自殺して死ぬほどのところを経てこそ、二人の少年の自立性は高まるのである。

大人が「悪」と見なしていることを敢えてするのは、大人に対する一種の宣戦布告のようなものである。「大人の言うとおりに生きているのではないぞ」という表現である。大人になって自分の子ども時代を振り返ってみると、自立の契機として何らかの意味での「悪」が関連していたことに気づく人は多いのではないだろうか。これはもちろん危険なことである。下手をすると、まったくの悪の道への転落につながるだろう。しかし、危険のない意味あることなど、めったにないと言うべきだろう。

【出典】河合隼雄著『子どもと悪』1997年、岩波書店。（一部を改変して抜粋）

問2-1 著者は、子どもにとって悪と自立がどのような関係にあると述べているのか、300字以内で説明しなさい。

問2-2 親や世の中に対する子どもの反抗について、そのポジティブな意味を、自身が経験した事柄を振り返りつつ、あるいは、これまで見聞きした例を挙げながら、500字以内で論じなさい。